

# 「ゲーム及び運動」領域に関するQ&A

### 【ボール運動系領域全般】

**Q** なぜ、「易しいゲーム」や「簡易化されたゲーム」が示されたのですか。

**A** 各種の球技の公式なルールでゲームを行おうとすると、プレーに必要となる技能が難しく、小学校のすべての児童がゲームを楽しむことは困難と思われます。ややもすると、積極的にゲームで活動する児童とボールにさわることができずにゲームが楽しめない児童、ルールが理解できずに意欲をなくす児童などが現れることも考えられます。そこで、すべての児童がゲームやボール運動の特性に触れ、楽しく進んで学習しながら、学習指導要領に示されたそれぞれの型ごとの指導内容を身に付けやすくなるよう工夫することが必要です。そのため、中学年（易しいゲーム）高学年（簡易化されたゲーム）の児童の発達の段階に応じたゲームを扱うことを明記しました。

**Q** 「易しいゲーム（中学年）」と「簡易化されたゲーム（高学年）」の違いは何ですか。

**A** 「易しいゲーム」は、簡単なボール操作で行える、比較的少人数で行える、身体接触を避けるなど、中学年の児童が取り組みやすいように工夫したゲームを指します。児童の実態に合っていてその運動の特性を損なわない、児童に寄り添ったゲームと言うことができます。低学年のゲーム領域で学習した「ボールゲーム」を活かして、仲間とかかわり合いながら集団対集団で競い合うゲームの楽しさに触れることをねらいとしています。一方、「簡易化されたゲーム」は、ルールや形式が一般化されたゲームを高学年の児童の発達の段階を踏まえ、プレーヤーの数、コート

の広さ、プレー上の制限（緩和）、ボールその他の運動施設や用具など、ゲームのルール様式を修正し、学習課題を追求しやすいように工夫したゲームを指します。中学年の「易しいゲーム」に比べるとスポーツに近づいたゲームであり、ゲームの楽しさや喜びに触れ、チームの特徴に応じた作戦を立てて攻防を展開できるようにすることをねらいとしています。

**Q** 低・中学年の「規則」と高学年の「ルール」の違いはあるのですか。

**A** ボール運動領域で使用している「ルール」は、一般化されたスポーツの公式ルールを基にしたものですが、高学年の発達の段階を踏まえ児童が取り組みやすいように簡易化されたゲームにおける修正したルールを意味しています。また、ゲーム領域で使用している「規則」は、それよりも易しく中学年の発達の段階を踏まえ、みんなが楽しめるように工夫した易しいゲームの行い方を指します。

### 【ゴール型】

**Q** 簡易化されたゲームで「攻撃しやすいゲーム」にするためには、どのような工夫が必要ですか。

**A** はじめの段階は、攻撃しやすい状況をつくるために、例えば攻撃側が3人、守備側が2人のハーフコートゲームをすることなどが考えられます。オールコートのゲームでは、動ける範囲を決めた制限区域の場（グリッド）を設定したり、ゴールの大きさや数、位置を変えて、得点しやすくしたりするなど、場づくりも含めた工夫も考えられます。

**Q** 小学校学習指導要領解説体育編に示されたラグビーとフラッグフットボールには、どのようなよさがありますか。

**A** 低学年で学習した「鬼遊び」を活かして、相手をかかわしたりパスをつないだりして敵陣までボールを持って運ぶ易しいゲームなので、事前の経験の差や個人の技能差が小さく、すぐになじめるよさがあります。また、「ボール操作」において、サッカーやバスケットボールの技能であるドリブルがないので、中学年の児童にとってもゴール型の攻防の楽しさに触れやすいこともよさとしてあげられます。



## 【ネット型】

**Q** ソフトバレーボールやプレルボールでは、サーブで得点が決まり、ラリーが続きません。このような場合にはどのようにルールを工夫すればいいでしょうか。

**A** ネット型のゲームは、相手チームがラリーを続けられないように、攻撃してプレーを断ち切ることを競い合う楽しさがあります。しかし、初期の段階では、ラリーが続きにくいいため、まず、ラリーが続くように、ルールや用具を工夫することが必要になります。例えば、仲間（兄弟）チームでネットをはさみ、何回プレーが続くかを数えると、プレーがていねいになります。また、最初のサーブは相手コート近くから、アンダーハンドで投げ入れるようにすることで守備者にとっては処

理しやすくつなぎやすいボールになります。その他、ソフトバレーボールにおいて、初期の段階ではワンバウンドまで許容したり、重量の軽いボールを使用したりすると、ボールが落下する地点に移動する時間が確保しやすくなり、プレーがつながりやすくなります。

**Q** ネット型のゲームで運動量を確保するためにはどのように工夫したらよいでしょうか。

**A** 体育は運動を通して学ぶ教科ですから、運動量を確保することは大切です。そのためには、ゲームを含め、すべての児童が数多くゲームや練習に参加できる機会を設定することが大切になります。



特にネット型では、ラリーが続くことが運動量の確保につながりますので、ゲームの攻防の中で、ある程度の時間、ラリーが持続できるようにルールを工夫することが必要です。また、運動量のみが問題なのではなく、学習すべき内容を確実に身につけていけるように運動の質も重要です。ゲームのみで運動量を確保しようとするのではなく、授業全体で運動量を確保する計画作りも大切になります。

## 【ベースボール型】

**Q** 「インニング終了の仕方を工夫したりして攻守交代が繰り返し行えるようする」には、どのような工夫がありますか。

**A** ベースボール型のゲームでは3アウトで攻守交代するのが一般的なインニング終了の仕

方ですが、どちらかのチームの攻撃が一方的に続き、もう一方のチームの攻撃が極端に短かいことが起こりえます。ベースボール型では、攻撃も守備も大切な学習内容ですから、その機会がもてるよう攻守交代が繰り返し行えるようにルールを工夫するとよいでしょう。具体的には、全員打ったら交代、2アウト制や時間交代制などの工夫をすることが考えられます。



**Q** 「内容の取扱い」に「ベースボール型」については取り扱わないこともできると示されていますが、それは、どのような場合ですか。

**A** 運動場の敷地が狭く、特に施設面などの理由で、ベースボール型のゲームを行うための安全が確保できない場合がこれに当たります。ただし、ルール、コート of 広さ、用具などを工夫することで実現可能な場合には、できる限り学習を保障し、中学校・高等学校につなげていけるよう配慮することが必要です。

## 【指導計画に関連して】

**Q** 学習指導要領解説の例示に示されている運動種目は、すべて取り扱わなければならないのでしょうか。

**A** 学習指導要領解説は、学習指導要領の趣旨や理念をわかりやすく解説したものです。そのため、実際の指導を行うにあたって、もっとも指導の参考となり、よりどころとなるも

のと言えます。例示は、指導内容を身に付ける上で有効であると考えられる運動種目の例などを示したものです。取り扱う運動種目が多くなると、学習を深めることが難しくなることも考えられますから、実際の授業で取り扱うことのできる時間数や児童の実態を考慮しながら、各学校の指導のねらいに合わせて、適宜選んで扱うことが有効です。学習指導要領で示された指導内容は、小学校から高等学校まで体系化が図られていますので、小学校の段階においては、その型に応じた基本的な「技能」、「態度」、「思考・判断」の内容がバランスよく、すべての児童に身に付くよう、適切な運動種目を選択し、6年間を見通した指導計画を設定することが大切です。

**Q** 高学年の「内容の取扱い」には、高学年は「アはバスケットボール及びサッカーを…」と記載されていますが、ハンドボール、ラグビー、フラッグフットボールを取り扱ってはいけないのでしょうか。

**A** 学習指導要領の改訂にあたっては、児童の発達の段階を踏まえて指導内容が明確化されています。この児童の発達の段階を踏まえると、小学校高学年は、中学校でよりスポーツとしての球技に近い形の学習をする前段階と考えられます。「内容の取扱い」で主として取り扱う運動として示されている運動種目は、旧学習指導要領において内容として示されていた運動であるため、型ごとに応じた学習をする上で、指導計画や教材などが揃っていると同時に、中学校へつながる「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」を代表とする運動と考えられます。この点を踏まえながらも、新しく例示された種目が型に応じた学習をする上で有効であると判断される場合には、指導内容や児童の実態に応じた指導方法を明確にするとともに、用具等の準備も工夫して行うなどに留意することが必要です。また、単元の前半のみ取り入れるなどの工夫も考えられるでしょう。

**Q 弾力化を生かした指導計画を立てるよさはどんなことがありますか。**

**A** 学習指導要領で、低・中・高学年の2学年ごとのまとまりで指導内容が示され、2学年のいずれかの学年で取り上げて指導することができるよう弾力化が図られています。このことから、一つ一つの単元に、まとめて多くの時数を配当することも可能となり、児童がじっくりと考えて学習に取り組んだり、繰り返し運動に取り組んだり、より児童の実態に応じ、指導と評価の一体化を図った学習が展開しやすくなります。そのことにより、学習指導要領に示された指導内容をすべての児童が身に付けやすくなると考えられます。



### 【指導内容に関連して】

**Q 「ボール操作」と「ボールを持たないときの動き」とありますが、それぞれの型で具体的にどのような動きが考えられますか。**

**A** 「ボール操作」は、シュート・パス・キープ（ゴール型）、サービス・パス・返球（ネット型）、打球・捕球・送球（ベースボール型）など、攻防のためにボールを制御する技能です。「ボールを持たないときの動き」は、空間・ボールの落下点・目標（区域や塁など）に走り込む、味方をサポートする、相手のプレーヤーをマークするなど、ボール操作に至るための動きや守備に関わる動きに関する技能です。主として低学年では、ボール操作を中心

としながら、その操作に至るための動きが指導の中心になりますが、学年が上がるにつれ、守備に関する技能などを実態に応じて加えていきます。

**Q ゲームの審判はどのようにすればよいですか。**

**A** 規則やルールを守ろうとする態度は、児童に身に付けさせたい指導内容として示されており、このことを踏まえて学習を計画することが大切です。チーム同士のセルフジャッジで行う、チーム内で審判を交代して行う、チームが交代して行うなどが考えられますが、児童の実態や学習の高まりに応じて設定していくことが大切です。

**Q 規則やルールを選ばせたり、工夫したりする際に留意すべきことはどんなことがありますか。**

**A** 技能を身に付けやすくするためには、児童の実態を把握し、その実態に合わせた規則やルールの工夫が必要です。また、その規則やルールは、児童にとって簡単で、分かりやすいことも重要です。しかし、規則やルールを工夫する際には、運動の特性を大切にし、学習指導要領に示されたそれぞれの型に応じた技能を児童が身に付けやすくなるようにすること、児童が立てた簡単な作戦を実行しやすくなることなどのねらいを明確にすることが大切です。